

---

# 永久（とわ）の契り

S e y R a i n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永久の契り<sup>とわ</sup>

### 【Nコード】

N4215D

### 【作者名】

S e y R a i n

### 【あらすじ】

私はある冬の夕方にひとりの少女に出逢った。この少女との出逢いが後の私の人生に及ぼすほどのことであつたとはこの時には、まだ気づけていなかった。私と少女の関係とは一体なんなのだろう…

…

少女・第1話

ひとりの少女と出逢った。

それは空気が冷たく澄んだ、ある冬の日のことだった。川越しにビルの谷間へ沈みゆく夕日を、ぼんやりと眺めていると、ふっと人の気配を感じた。振り返るとそこに、少女は佇んでいた。髪はすらりと腰にとどくほどに長く、夕日を全身に浴びた姿は辺りの風景に溶け込むようで、神秘的に映って見えた。

少女はこちらに気づいたのか嬉しそうに、にっこりと微笑んだ。だが、すぐにその表情は消えた。私を知っているかのようにじつとこちらを見つめ、切なそうな顔をした。何かを伝えたいが伝わらないとでも言いたげに……。

《何故だろう……》  
私は少女と初対面であるにも関わらずその顔を見てみると、何処か懐かしいような気持ちになっている自分に気づいた。

《もしかしたら以前、何処かですれ違ったのかも知れない。》  
そう考え、必死に記憶をたどるが、頭の中にはモヤがかかったように霞んでいる。しかし、記憶の奥底で何かがつつすらと見え隠れするように引っかかる。それは、まるで夢を見た後の感じにも似た感覚であった。

《夢！ そうだ、夢だ！》  
私は、ある夢のことを思い出した。どれくらい前であったのかはつきりとは覚えていないが、やはり夕暮れ時の道端にキラキラと光るものを見つけた。近づいてみるとそれは、白っぽいそれでいて透明感のある石であった。なんだか自分が以前に落とすた物のようない感じがして、その石を拾い上げ家に持ち帰った。その石を眺めていると不思議と心が和むような、そして切ない気持ちがあった。

その晩から夢を見るようになった。年に数回ほどであるが、時に

は何日も連続して夢の続きを見ることもあった。

夢の内容は違っのだが、何故か必ずといってよいほど女性が登場した。その女性達には、共通の雰囲気たたいふが漂ただよっており、目覚めるといつも何処どこかで出逢ったことのあるような懐かしい感情が込み上げてきた。その女性達と同じ雰囲気たたいふを少女に感じたのだ。

もう一度、顔を確認かめようと少女の方に視線を送ったが、すでに少女の姿は其処そこになかった。

《あの少女は……》

辺りあたを見やったが、少女を見つけることはできなかった。夕日はすっかりと沈み、替わってまるい月が白っぽく見えていた。ふと、石のことを思い出し、私は帰宅の途とについた。

少女・第2話

家に着いた私は、机にしまつてあつた石を取り出して眺めながら、拾つた時のことを思い出していた。薄汚れていたが、それでも夕日を浴びてキラキラと輝いていた。もしかしたら、何か宝石の原石ではと、心がときめき、家に持ち帰って丁寧に洗つたのだ。

今もその石がなんであるのかは、わかつていない。宝石店で調べて貰おうとしたこともあつたが、ただの石だつたらと考えると気恥ずかしくて、やめてしまつたのだ。たとえ、ありふれた石であろうとも、私にとっては特別な存在であることに、変わりないのだから。

それ以来、石を机の引出しに仕舞い込み、私の目に触れることはなくなつたのだ。その晩から、例の夢を見始めた。最初の頃は、毎日といって良くくらいに頻繁に見ることと、目が覚めてもしつかりと覚えている内容に困惑したものだ。

私は、その石を手に取り寝転びながら、あらためて眺めてみると、以前のように何故だか心が和んだ。しかし、なんとも言えないような切ない気持ちにもなつた。

もしかしたら、未だに毎日、その夢を見ているのかもしれない。しかし、仕事などの日常の繁忙感の中で次第に記憶に残らなくなり、徐々に夢を見たという感覚が減つたのかも思つたりした。

《それにしても、こんな無機質な石と、あの少女に同じ感情が込み上げてくるとは……》

我ながら、自然と笑みが込み上げてきた。ただ、少女にもう一度あつて、あの時に何を言おうとしていたのか、確かめてみたいと思つた。

《また、逢えるだろうか……》

そう考えながら、いつの間にか私は眠りに落ちていった……。私は、どこまでも続くかと思われる草原に立っていた。その遙か

遠くに薄っすらと森が霞かすんで見えた。

以前にも何度となく、夢の中でこの風景を見た記憶がある。その時はどんな出来事があったのだろう。などと考えながら、私が草原の真ん中に立ち尽くしていると、少女に再び出逢った。

出逢ったというよりは、現れたといった方が適切かもしれない。彼女は森の中から、宙に浮くように静かに、すつと近づいて来た。

いつの間にか眠ってしまい、夢の中だという自覚のない私は驚いた。夕暮れに出逢った時も、突然に姿が景色に溶け込むよう現れた少女に神秘的なものを感じていたので、《超能力？ 何か不思議な力を使えるのか……》

目の前で起こった現象を、必死に頭の中で整理しようとしている私のことなどお構かまいなしといった感じで少女は、私かが持っている石と同じと思われるキラキラとした石を目の前に翳かざした。

「えっ、どうして……」

思わず、私の口から声が漏れた。何故なぜ、彼女があの石を持っているのだ。それとも、あれは私の物で、落としてしまったのだろうか。慌てて服やズボンを弄もるように石を探すのを見て、彼女は首を横に振った。

そして、心配そうに私を見つめているのだ。私に石を持っているか、と訴えるような眼差まなましで……。

石はズボンのポケットの中にあつた。私は、それを彼女の前に差し出した。

少女・第3話

すると、少女は安心したのか、夕暮れ時に見せたにっこりとした表情を浮かべた。そして、ゆっくりと喋り出したのだった。

「ああ、逢えた…… やつと 話すことできた……」

そう言った声は、夕暮れ時に言葉を交わしていないのにも関わらず、何処かで聞き覚えのある声のようだった。

私も静かに口を開いた。

「夕暮れに川辺で逢ったよね。僕も君にもう一度、逢いたいと思っ  
ていたんだよ。どうして、さっきは話しをせずにいなくなったのか  
な」

そう言ったすぐ後に、ある矛盾に気が付いた。

「先ほど逢ったのは夕暮れだったのに、どうして今は昼間なんだ。」

それにこんな場所に来た覚えもないし、おかしいぞ……」

混乱した私は、少女に向かって矢継早に質問を投げかけた。

「此処は何処なんだ？それに君は誰なんだ」

すると、少女の表情が一瞬だが少し寂しげに変わった。が、また元のにっこりと微笑んだ表情に戻り、

「此処は、あなたの夢の中よ。そして……、私は沙羅」

夢の中で此処は夢と言われてすぐに納得できる者がいるだろうか。しかし、そうと言われれば腑に落ちる気もする。

なんとなくではあるが、事情を理解しかけた私は平静を装いながら話しを続けた。

「沙羅、夕暮れに逢った君は何か言いたげだったけど、どうしてあの時は黙って居なくなったの？」

沙羅からの返事は、また私を困惑させるものだった。

「それは、あなたがその石を持っていなかったから……」

話しの意味が呑み込めない私は聞き返した。

「それは、どうということなの？ 石を持っていないと話せないなん

て

沙羅は少しずつ、ゆっくりと説明を始めた。

「あなたの持つている石と私の持つている石は、元々は一つの石でした。それをある御方の力で二つにして頂き、二人で分け合ったものなの」

「ちよつと待って。それじゃあ、君と僕は以前にも何処かで逢っているんだね。」

「ええ、遠い昔に……」

《僕がこの石を拾ったのは、はっきりとは思い出せないけど、遠い昔って程じゃないはずだ。それに辺りに人はいなかったし、いったいつ頃の話しなんだろう……》

私の考えが伝わったのか、沙羅はまた話し始めた。

「この石を分け合ったのは、現世ではないの。もつと、ずっと昔……。あなたと私が一緒に時を過ごしていた頃に……」

そう言っつて、沙羅は目線を上げ遙か遠くを見るかのような表情をした。

## 少女・第4話

私は俄かには信じることができず、聞き返していた。

「現世じゃないって？ それに君と一緒に時を過ごしたって？」

沙羅はうなずいた。そして、何も覚えていない私に対して悲しげな表情を浮かべた。

沙羅は私を諭すような口調で話し始めた。

「その石は金剛石というものの。その石を私たちを哀れんだ、あの御方がくださったの。再び、巡り（めぐ）逢うことができるように……」

「金剛石って、ダイヤモンドのことだろう。そんな貴重な物を誰がくれたんだい？」

《この石は、ダイヤモンドだったのか。そんな物を拾っていたなんて。いや、ちよつと待てよ、確か日本ではダイヤモンドは採れないはずだ。すると、沙羅の言っていることは本当のことなのか……》

私の頭の中は、また混乱してきた。沙羅は、押し黙っている私の気持ちを察したかのように話した。

「金剛石は、仏教に出てくる金剛界つまり、この世ではない精神世界に存在した石で、どの物質よりも硬いとされたの。それ故に征服できない、懐かない、という意味があるわ。金剛石とダイヤモンドを同じと考えるようになったのは、地上で一番硬い物質とわかった後のことなの。だから、ダイヤモンドと金剛石は厳密には別の物なの」

「この世ではない世界って……。それに沙羅、君とこうしていると何故だかとても切ない気持ちになるんだ。どうしてなのか自分でもわからないんだ」

私は、今の自分の正直な気持ちを打ち明けた。すると、沙羅は元の明るい表情に戻って、満面の笑みを浮かべた。

「私も同じ気持ちよ。だから、夕暮れに実物のあなたを見つけた時

はずごく嬉しかったわ。だって、あなたをずっと探し続けてきたんですもの……」

私は段々と何故、金剛石を見て沙羅に対するのと同じように切なくなっただのか、わかりだした。それは、きつと二つの金剛石が互いの気持ちを伝えていたからなのだろう。これで、過去に見た夢のことも合点がゆく。夢に出て来た女性は、全て沙羅の分身か前世での姿だったのだろう。

《しかし、二人に金剛石を分け与えてくれた人物とは誰なのだろう》  
私は、沙羅に今一度、尋ねてみた。

「沙羅、この金剛石をくれた御方とは誰なんだい？」

すると、沙羅は黙って自分の金剛石を、私のものに重ね合わせたのだ。二つはパズルの破片を組み合わせたかのようにピッタリと合い、一つの塊となつて眩いほどの光を放ち始めた。その光は徐々に熱を帯び、やがて閃光が迸つたかと思つた瞬間、私は弾かれるような感覚と共に現実の世界へと引き戻された。

目が覚めてからも尚、まだはつきりと掌に熱い感覚が残っているような感じがした。その手の中には、夢で少女が金剛石と呼んでいた石を握り締められたままつだった。

ふと、空腹を覚えて時計に目をやると時間は既に午後九時を回っていた。私はいつもより少し遅い夕食を済ませると、今度はきちんとベットに横たわり、夢の中での出来事を回想してみた。

「あの少女の名は沙羅というのか…… また逢えるだろうか……」  
そう呟き、実際に少女の名前を直接、訊ねてみたいと考えた。だが、少女との出逢いが余りにも印象的だった為に、あのような夢を見たのかもしれないなどと、あれこれ考えを巡らせているうちに何時しか、また意識は暗闇に吸い込まれるように朦朧とした状態に陥っていた……。

・夢の追憶・第1話

ぼんやりとした意識の中で、私は徐々に周囲の景色を垣間見ることができると判断力を取り戻しつつあった。そして辺りを見回すと、これまでとまったく違う景色が広がっているではないか。

そこは、人々が忙しく往来する街中で、活気が漲っている。だが、見慣れた高層ビルもマンションも見かけない。その代わりと言っては変であるが、現在ではすっかり見られなくなって久しい路面電車が、ゆっくりと走っている。なんとなく、不思議な懐かしさを感じさせる場所であった。

しばらく街中を眺めていた私は、違和感を覚えた。視点がいつもと違うのだ。それはまるで鳥にでもなったかのように、上から見下ろしているのである。

ふと、一人の青年に目が止まった。その青年はキョロキョロと街中を見回すと、ある一方に向かって走り出そうとした。そのすぐ前を路面電車が横切ろうとしている。私は電車と衝突するのではと、思わず声をあげた。

「危ない！」  
そして、目を瞑った。

しばらくして、どうなっただろうと再び目を開けると、どうしたことか先ほどまで見下ろしていたはずの光景はそこにはなく、路面電車が目の前で停車していた。

衝突しそうになったのは青年のはずだが、周りの人々も、まるで私が事故に遭いそうになったと言わんばかりの表情で遠巻きに、こちらを覗き込んでいる。

私はこの状況を必死に理解しようと努めた。

《どういうことだ?》

その時、頭上から怒鳴り声が響いてきた。

「何やってるんだ! 死にたいのか!」

それは、電車の運転手からのものだった。

「すみませんでした。」

私は、反射的にその言葉を口に出していた。そして、急いでその場を小走りに立ち去ろうとした。走りながら、あの青年はどうなっただろうと辺り<sup>あた</sup>を見やったが、姿は見えなかった。

私は、とりあえず青年が向かおうとしていた方角に足を進めた。走っていると、途中に『カフェー』と書かれている看板が目に入った。

走ったせいか喉に渴き<sup>かわ</sup>をおぼえた私は、飲物をとろうとその店に入る事にした。近づくにつれ、建物が予想したより大きく立派であることに気づいたが、さほど気に留めることもなく店内へと入っていった。

建物の中は薄暗く、私のよく行く喫茶店とはイメージが大夫違う。どちらかというところやスナックの雰囲気をかもし出していた。

そこに、一人の女性が近づいてきた。

「いらつしゃいませ」

女性は、にっこりと微笑<sup>ほほえ</sup>みながら挨拶をすると

「今日は何にしますか？」

と、注文を聞いてきた。

私はとりあえず、すぐに飲める物と思い

「オレンジジュースを下さい」

と答えた。

すると、店の奥の方から野太い笑い声が出たかと思うと、

「坊や、ジュースが飲みたいや『ミルクホール』に行きな」

という声が返ってきた。よくよく見ると赤ら顔をした男性がそこには座っていた。そして、その男性は更にこう付け加えた。

「兄ちゃん、さよの気を引こうと思って冗談まで言うようになったのか」

どうやら、さよというのは注文を聞きに来た目の前に立っている女性らしいことは、すぐにわかった。しかし、気を引こうとした

と言われたことと、坊や扱いされたことが心外だった私は反論した。「違います。喉が渴かわいていたのですぐに飲めるものをお願いしたのです。それに、喫茶店で飲物を注文するのは当たり前じゃあないですか」

すると男性客は

「ああ、飲物を注文するのは当たり前だな。だが、此処こゝは『カフェー』だぜ、頼むなら酒だろうが」  
そう言つて、また野太い声で笑つた。

私には、彼の言っている意味が理解できなかった。

・夢の追憶・第2話

私が、真剣に考えている様子を見た女性は、少し心配したような様子で尋ねてきた。

「さつき、街で電車に轢かれそうになった人がいると噂になっていたけど彼方？」

その話しを聞いて、青年のことを思い出した。そして、この女性がかもしかしたら彼のことを知っているのではとの思いから、青年の風貌を説明して尋ねてみた。

「さよ と呼ばれる女性は、以外なほどあっさりと答えてくれた。

「ええ、知っているわよ」

私は、嬉しくなつて更に青年が何処にいるのかまで尋ねた。すると、女性の表情は益々（ますます）心配そうになつて、こう言った。

「私の目の前にいるわ。だって、それは彼方だもの」  
そして、こう続けた。

「今までののは、冗談で言っていたんじゃないのね。事故の影響かしら……。少し休んだ方がよさそうね」

そう言つと店の奥に戻つていった。

《私があ青年だつて！ どういうことだ……》

私は自分に問いかけた。そして、混乱している頭の中を整理しようとする。

しばらくして、女性が水の入ったコップを持って私の前にやつて来た。コップをテーブルの上に置いたそのすぐ後ろには、先ほど私を笑い飛ばした男性が一緒にいた。

「これを飲んで気持ちを落ち着けて。それと、先生に見てもらつた方がいいわ」

どうやら、男性は医者らしかった。コップの水を飲み干すと、私の目を視察したり、脈をとったりした。そして、口を開いた。

「事故に遭つたのは、兄ちゃんだったのか。知らなかったとはいえ、

からかつて悪かったな。今、見たところでは特に異常はなさそうだが、頭を打っているかもしれないねえからな、記憶が欠落したのはそのせいかもしれない。しばらく用心した方がいい」  
そう言つて、また奥の席へと戻つていった。

さよ という女性は、心配そうにこちらを見つめている。そこで、自分が体験したことを順を追つて話してみた。

まず、自分が上空から景色を眺めていたこと。何故か青年が目に入ったこと。青年が事故に遭いそうになり、目を瞑つた次の瞬間には地上にいたこと。青年の姿が消えていたこと。青年を探している途中で此処に立ち寄つたこと。そして、自分がその青年だと言われたこと。

最後まで話しを黙つて聞いてくれたいた女性がこう言つた。

「まるで、私がよく見る夢に似ているわね。私、時々違う世界の上空を飛んでいる夢を見るのよ。もっとも、彼方のは夢ではないらしいけど」

彼女の話す表情を眺めているうちに、懐かしくも切ない感情が湧き上がるのを感じ、親近感を覚えた。

私は、初めて逢つたにも関わらず、そういった感情を抱かせる彼女自身にも興味を持ち始めていた。もっとも、彼女は私を青年と思つているのだから、初対面とは思っていないのかもしれないが……。そこで、それとなく疑問に思つていることについて質問を試みることにした。

「さよさんは、私を知っていると仰つていましたが、此処にはよく来ていたのでしょうか？」

「ええ、そうよ。毎日のようにいらしてくれただわ」

彼女はうつすらと笑みを浮かべながら答えた。

「毎日。そんなに頻繁に……」

「もっとも、最初は先生に会われる為にいらつしやつたのよ」

「先生というのは、先ほどの男性のことですか？」

「ええ……」

彼女の顔から笑みが消え、寂しそうな表情でこちらを見つめていた。おそらく、私 青年 が記憶を失ったことを改めて実感したのだろう。

・夢の追憶・第3話

そして、まるで他の人のことを聞かせるように、私 青年 のことを話し始めた。

「彼方は、書生さんなのよ。そして、先生をとても尊敬して慕っていたの。先生は見かけは、あんな粗暴な感じだけど私たち貧しい者たちに、とてもよくしてくださいさるの。そんな先生のように将来なりたい。人から必要とされる医者になりたいと言うのが彼方の口癖だったわ」

《彼は、学生だったのか……。しかし、書生とはまた、ずいぶん古めかしい呼び方だな。先ほどの路面電車といい、此処は私のいた時代ではないのかもしれない。もしかしたら、彼はこの時代の私だったのかもしれない……。それならば、私はこの時代のことをもっと知らなくてはならない。何故なら、もう元の時代に戻れないかもしれないのだから……》  
そんなことを、ふと考えていた。

「そうですか。私は医学を志していたのか。ところで、先ほどから気になっていたことがあるのですが、よろしいですか？」  
「どうぞ」

彼女の顔には、また笑みが戻っていた。

「此処に入ってきて、オレンジジュースを注文した時に、先生がまるで此処で頼む物ではないようなことを仰っていましたけどどうしてなんですか。普通、カフェというからには、お茶や、ジュースを頼むところでしょう？」

そう言うと、彼女は少し啞然とした様子でこちらを見ていたが、やれやれといった表情で説明を始めた。

「あのね、普通はお茶が飲みたければ『お茶屋』さんに、ジュースやミルクといったものを飲みたければ『ミルクホール』に行くわね。此処に来るのはお酒が飲みたい人達がやって来るの」

なるほど、この時代では『カフェー』とは、アルコールを提供する場所だったらしい。これで、またひとつ疑問が解消された。今度は彼女について質問してみようと口を開いた。

「わかりました。今度はさよさん、あなたについて聞いてもよろしいですか。私のことを存じてらっしゃるようなので、それが私を知ることにもなりそうですから」

彼女はしばらく迷った仕草を見せたが、承知してくれた。

「では、まずさよさんの『さよ』は、どんな字を書かれるのですか？」

すると、小走りに店の奥へ走って行き、紙とペンを手に持って戻ってきた。その表情はとても嬉しそうで、瞳が輝いて見えた。そして、興奮気味に口を開いた。

「彼方がこの店に来るようになった頃に、私も此処にやって来たの。まだ、名前の決まっていなかった私に彼方が付けてくれたのよ」

そう言っ、紙にペンを走らせた。その紙の上には、決して上手とは言えないが優しさを感じさせる字で『沙世』という文字が書かれていた。

「私が名づけた……。ということとは、源氏名みたいなもので本名ではないのか……」 てつきり、本名だと思っていた私は少し残念に思ったが、ここは私の知っている『カフェー』というより、『バー』や『スナック』に近い雰囲気を感じ出しているのだから、当たり前と言えはそうなのだろう。そんなことを考えていると、彼女は更には話を続けていた。

「さよの『沙』は、弁天様の別名でサラスヴァティーからとったもので、この神様は豊穰や財運と流れるもの全て、言葉や音楽なんかを司るそうよ。私が裕福になれるようにと。それに、美しいんだって……」

最後は呟くように小声になり、俯いた。彼女に目をやるとほんのりと顔に赤みがさし、照れているのがわかった。その顔がなんとも愛らしく、そう名づけた訳がわかったような気がした。

「ふふ、なるほど…。では、さよの『世』は？」

彼女は、はっと我に返ったようにピクリと動いたかと思うと、また話を続けた。

「それは、サラスヴァティーのように世の中の人々を見守り、明るく励ましてくれるようにと……」

そう小声で言うと、また俯うつむいた。先ほどより更に赤みが増し、まるで顔から火が出そうなほどに火照ほてっているのがわかった。

私のことを意地悪な人間と彼女は思ったのではないかと心配になったが、程なくしてその火照ほてりも冷めたようで、

「だから、私この名前すごく気に入ってるの。世の中の人を全部なんて私には到底無理だろうけど、お店に来てくれるお客さんにはそうでありたいなって」

そう言って、にっこりと微笑ほほえんだ。

・夢の追憶・第4話

その笑顔に、彼女なら色々と親切に教えてくれると思った私は、次の質問を投げかけた。

「では、此処こゝがお酒を出すお店であることは先ほどの説明でわかったのですが、『お茶屋』さんや『ミルクホール』とは、どう違うのですか？」

そう質問をすると、彼女はまた俯うつむいてしまった。今度は先ほどの表情とは違い、どこか、おどおどとしている。

「おい、ちよつとこつちに来い！」

その時、奥の方から、怒鳴り声に近い声があった。振り返ると先生だった。私はきよとんとした。何故、先生が声を粗あらぶらせているのかわからなかった。

その迫力に圧倒されながら奥の席に近づいて行くと、先生は激昂げきこうして

「そんなことを、いちいち女給じよめいに聞くとは失礼な奴だ。いくら記憶が飛んでいるからといって、常識を知らんのか。彼女を辱はづかしめるつもりなら出て行け！」

と、私は一喝いっかつされてしまった。

まるで意味のわからない私は、何故なぜという気持ちになったが、あまりの剣幕に聞いてはいけない話題に触れたのだと感じ取った。

「すみませんでした」

すぐさま、先生に向かって謝った。すると、先生は少し声を抑えて、こう言った。

「謝るなら、彼女にだろう」

たしかに、そのとおりだ。彼女の気分を害してしまったに違いのないだから。だが、どうして、気分を害してしまったのか理由がわからないままでは詫わびようがない。だからといって、彼女に直接聞くことは出来ないのです、先生に小声で聞き返した。

「彼女に謝りたいのですが、本当に自分はお店の違いがわからないので、どこが失礼に当たったのか検討がつかないのです。大変申し訳ありませんが、教えていただけると有り難いのですが」

すると、先生はまた視察でもしているかのように、まじまじと私の目を見つめ、しばらくして呟いた。

「人を傷つけるような冗談を言ような奴ではないしな。しかし、ここまで意識がはっきりとしていながら、まるで全てを忘れたようになってしまうものなのか……」

「それで、私の質問の何処に失礼な点があったのでしょうか？」

私は、考え込んでいる先生に催促するように再度、訊ねてみた。

「それはだな……」

先生は急に周りの者たちには聞こえないような小声で話し始めた。

「いいか、そもそもカフェーっていうのはだな、酒などのアルコールを出す店なのは、さつき沙世が言ってたよな。それと、店の中を見回してみる。沙世と同じような格好をした女性が何人かいるだろう。彼女達は女給と言つてな酒を客に注いだり、話相手をしたりと、要は客をもてなすのが仕事なのさ」

「つまり、お客を接待するわけですね」

「ああ。此処の店は俺様のような紳士がいるので、割かしマシな方だが、店によつては助平な客もわんさかといふ。しかし、彼女達は客からの祝儀が稼ぎだから、そんな客でも嫌な顔もできずに、もてなすんだ」

「えつ、お店からは給金が支払われないのですか？」

「大体の店がそうさ。それに、女給をするのは貧しい村の出の娘がほとんどだ。学もほとんどないような彼女たちには、こういふところで働く以外に金を稼ぐ方法がないのさ」

そこまで聞いてやっと彼女が何故、俯いてしまったのかが理解できた。と、同時に私はなんと愚かな質問をしてしまったのだらうと悔いた。知らないからで済まされるものではない。彼女の尊厳を傷つけてしまったのだから。

「知らなかったとは言え、私は彼女になんということを知ってしまったのでしよう。先生

生教えていただき、ありがとうございました」

私は先生に礼を述べると、俯うつむいたままの彼女の元に静かに戻った。「沙世さん、すまなかった。どうか許してほしい。自分の軽率さが恥ずかしい……」

そう言うのがやっとだった。あとは、彼女の態度を見守るほかなかった。少し間をおいて

彼女が、ぽつりとこう言った。

「彼方は、本当に忘れてしまったのね……」

そして、私に向かって笑ってみせた。それが精一杯の造り笑顔であることが痛々しかった。

「本当にすまなかった」

私は繰り返し詫わびた。すると、彼女はこう言った。

「そのことはいいのよ、気にしないで。ただ、彼方が今までのことを忘れてしまったんだと思うと寂さびしかったの。でも、それは彼方が望あんでなったことではないんですものね。むしろ、気の毒なのは彼方の方……」

自分のことよりも、相手を思いやる。そんな優しさに触れ、もっと彼女について知りたいと思った。

すると、奥からまた野太い声が響いた。

「沙世、兄ちゃんを家まで連れて行ってやりな。その様子じゃ自分の家の場所も覚えてなさそうだからな。いいだろう、マスター？」

声のした方に視線を送ると、先生の座っているカウンター越しに立っている男性がいた。その人が店主なのだろう。彼は黙だまってうなずくと、店の更に奥の方へ視線をやった。それが沙世に対する合図だということは見当がついた。彼女は私を見て、

「ちょっと、待っててね」

そう言って、店の奥に姿を消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4215d/>

---

永久（とわ）の契り

2010年10月8日12時13分発行